city & life

都市のしくみとくらし

別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

第31回（2020年度）
緑の環境プラン大賞受賞作品集

city&life 別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

バナキュラーな市民のニワも、庭匠の庭園芸術もみんなちがってみんないい

審査委員会委員長 進士五十八

ますます緑の環境プラン大賞はおもしろくなってきた。

コンクールに応募するとなると、つい力が入ってプロに頼んでパーフェクトにと考える。結局無難な案に。ところが31回を重ねた緑の環境プラン大賞は逆に目的も応募者も場所性も提案者も活動者世代もまさに「環境プラン多様性の時代」といった感じになってきた。

環境設計する造園家も、建築家同様大学で学んだデザインの基本どおりに設計する。だから優等生案はつまらない。ひとも敷地も皆ちがう。だから、みんなちがってよい。なのに、プロは“斯く在るべし”と合理的設計に仕上げる。図面は美しいが、内容は“いまいち”。

ところが国土交通大臣賞の東京港区の「芝のはらっぱ」やコミュニティ大賞の砺波市の「栴檀野(せんだんの)自治振興会」は狭いポケット・ガーデンなのに、芝屋根の小屋、パーゴラ、野外卓、花壇が満載。また仲間が思い思いに園芸やお茶を愉しみ手づくりテントの優しいコーナーのコミセン風景になっている。

皆さんは、「建築家なしの建築」(Architecture without Architects)とか「バナキュラー」(vernacular)をご存じだろうか。整然と施設を配置するプロの仕事とちがって地域住民の思いと生活感あふれる「みんなのニワ」のすばらしさを伝える言葉である。

その点「緑の環境プラン大賞」は、いよいよホンモノの段階に来たのかもしれない。元来、ニワは自らつくり自ら遊び育てるもの。皆さんと皆さんの地域のもの。だから「みんなちがって、みんないい」(金子みすゞ)のだ。

もちろんそういうニワが進化して、東京オリパラの延期で2021年に完成した「おもてなしの庭」大賞、日本造園組合連合会による港区芝公園「匠の庭師が日本庭園文化を世界に発信」で見られた“竹藝”の技と美の実力や庭匠の“日本庭園はアート”だという現代性も忘れてはいけないと思う。

しんじ・いそや―― 福井県立大学長／東京農業大学名誉教授・元学長／農学博士(環境学・造園学)

表紙――農家の庭に学ぶ「持続可能な都市ガーデン」(関連記事:p2)
裏表紙――芝のはらっぱ(関連記事:p8)
photo:坂本政十賜

contents

シンボル・ガーデン部門

緑化大賞	株式会社ユニマットリック	農家の庭に学ぶ「持続可能な都市ガーデン」	京都府亀岡市	2
	特定非営利活動法人 こどもコミュニティケア	みなが出会い・育み・共に生きる「みのりの緑地」	兵庫県神戸市	4
	豊富地域・農の未来創造協議会	みどりのゆりかご～豊福の生き物と子供たちを育む庭～	熊本県宇城市	6

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	芝のはらっぱ実行委員会	芝のはらっぱ	東京都港区	8
コミュニティ大賞	社会医療法人北斗 十勝自立支援センター 介護老人保健施設かけはし	地域の遊び場・憩いの場 かけはしパノラマ屋上ガーデン	北海道帯広市	9
	有限会社ウィステリアエステート	うわのまち つどいのつつじガーデン	栃木県鹿沼市	10
	佐野市米山南町会	米山南町会花いっぱい活動	栃木県佐野市	11
	江南の藤保存会	樹齢140年江南の藤・藤棚リフレッシュプロジェクト	埼玉県熊谷市	12
	NPO法人緑のきずなプロジェクト	花園公園レイズドベッドプロジェクト	千葉県千葉市	13
	恵泉女学園大学 人間社会学部 社会園芸学科	オーガニック・エディブル・コミュニティガーデン多摩	東京都多摩市	14
	栴檀野(せんだんの)自治振興会	まち・里・ひとが繋がる♬ 栴檀野コミュニティガーデン	富山県砺波市	15
	聖隷クリストファー大学付属 クリストファーこども園	数世代の人々が憩う中で子供を育てる聖隷の森づくり	静岡県浜松市	16
	京都府立農芸高等学校	僕たちの発信緑(はっしんりょく)!～郵便局から緑の風をお届けします～	京都府南丹市	17

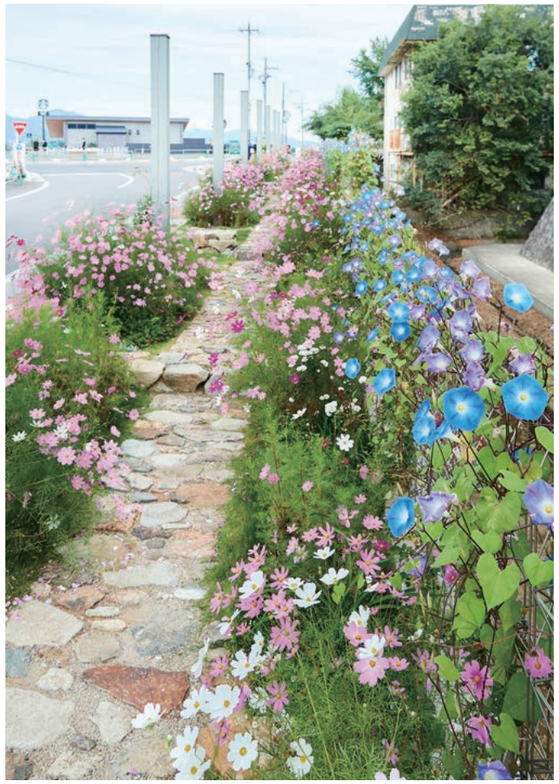
特別企画「おもてなしの庭」

大賞	一般社団法人日本造園組合連合会	匠の庭師が日本庭園文化を世界に発信	東京都港区	18

※特定非営利活動法人こころの森、株式会社チャレンジドジャパンについては次回掲載予定

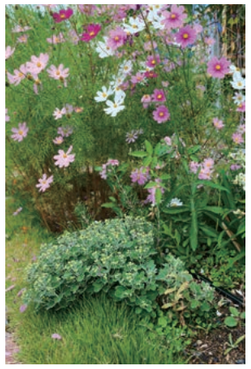
株式会社ユニマットリック
農家の庭に学ぶ「持続可能な都市ガーデン」

京都府亀岡市



●駅から保津川下り乗船場へ続く「亀岡いきいきガーデン」

●宿根草は市民が自分の庭で育てたものがほとんどだ



●市民は、自由に、好き勝手に花々を植えていく

●ダリアのうしろの朝顔（ヘブンリーブルー）は、霜が降りる頃まで花を咲かせる

●不要な石材を再利用した敷石

ローメンテナンスで花のある環境を実現

「亀岡いきいきガーデン」は、JR亀岡駅の北側、亀岡駅北土地区画整理事業区域に隣接し、駅から保津川下り乗船場への導線上に位置する公共用地。区画整理事業地内には、市が誘致したサッカースタジムがあり、新たなまちづくりのシンボルとなる場所で、市が継続的にまちづくりに取り組んでいくエリアでもある。

亀岡市は、2018年より「亀岡まるごとガーデン・ミュージアム構想」を打ち出した。これは、暮らしの豊かさや快適性の創造を目的に、市域全体を小盆地宇宙と捉え、回遊式庭園のように、水や緑で結びつけようというもの。「亀岡いきいきガーデン」もこの構想に沿うものだが、これまでとはまったく異なる緑化プランが試みられている。

ランドスケープデザインでは実績のある神戸国際大学の白砂伸夫さんの指導のもと、公共植栽では当たり前の毎年花を植え替えることをやめ、地元で育てられた植栽を、末長く育てていく方法がとられたのだ。従来の植栽がフロー型だとすれば、今回の方法はまさにストック型。

「農家の庭を見ると、昔から植えられているものを、何もしないで育てています。本来、それが花の育て方だった。ここでは、農家のおばちゃんの知恵を生かそうと思った」と、白砂さんは語る。

SDGsの時代にふさわしい、ローメンテナンスで緑の環境を実現する緑化プランの試みに期待したい。

●「亀岡いきいきガーデン」には、毎日たくさんの虫が集まってくる

●ダリアに混ざって黄色のコスモスも咲いている

※第30回（2019年）にて本賞を受賞

特定非営利活動法人こどもコミュニティケア
みなが出会い・育み・共に生きる「みのりの緑地」

兵庫県神戸市

●ハーブ類が混植され、北欧の庭のような雰囲気を醸し出している

「共に生きる」地域社会の拠点として

神戸市垂水区。阪神・淡路大震災後、ニュータウンとして開発され、2006年から入居がスタートした新しい街「ガーデンシティ舞多聞」。この一角に2015年、医療的ケア児・障害児・健常児の総合保育を行う特定非営利活動法人こどもコミュニティケアの園舎が開設された。シュタイナー教育を基礎とした家庭的な雰囲気での保育を志す施設にふさわしい、温かな佇まいを見せる。法人代表の末永美紀子さんは「豊かな自然に囲まれた恵まれた環境ですが、敷地内の整備まで手が回らず、造成されたままの状態でした」と教えてくれる。そこで今回の助成を活用し、一体を地域に開かれた「みのりの緑地」への改良を計画。舞多聞地区では、緑化活動や自然と触れあうイベントなどを実施している一般社団法人舞多聞エコ倶楽部が活動しており、協働しての維持管理体制も築いた。

クヌギ、コナラ、ケヤキなど、周囲の里山植生を基本とした植栽を中心に、クリやカキなど「実り」のある果樹を散りばめた。この他、ローズマリーやオリーブなど、匂いを感じ、触って楽しめるような植栽も意識した。敷地の東面は急な斜面地となっているが、ここにも菜園や花壇を配すると共に散策路も整備した。ただコロナ禍を受け、整備は予定通りに進まなかった。しかし今後も、地域の人々と相談しながら、ゆっくり手を入れていく予定だ。そんなプロセスが、この園庭を「共に生きる」場へと育てていくのだろう。

●斜面地には散策路を整備。ジニアが色とりどりの花をつけている

●園庭の一角に置かれた、車椅子のまま通り抜けられる土管

●園舎のポーチに配された、土・水・火・風をテーマにしたモザイク

●潮風が吹く斜面地にはオリーブやローズマリーを植栽

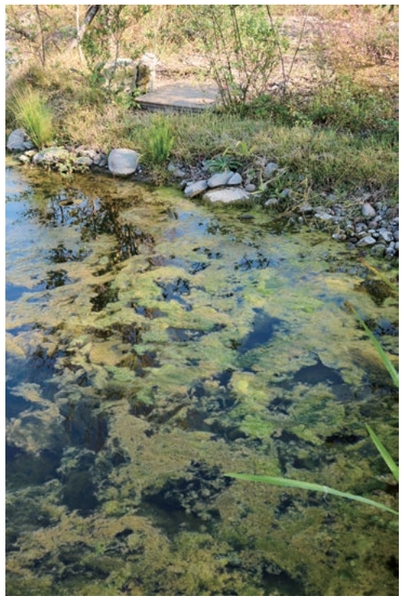
●一帯を「神戸ともそだちの丘」と称する施設のエントランス。「みのりの緑地」完成後は、月～土曜日の8～18時まで、利用者・ボランティア登録制度を通じて、原則的には常時公開予定

●木々が育ってくれば、奥の里山との一体感が生じる予定

●園庭に緑が増え、保護者や地域の人たちにも喜ばれている

豊福地域・農の未来創造協議会
みどりのゆりかご
～豊福の生き物と子供たちを育む庭～

熊本県宇城市



●昆虫、両生類、魚類の命を育む水生植物が豊富な本格的な湿地（ビオトープ）

●落ち葉が堆積したビオトープに、今年ゲンゴロウがたくさんやってきた

コンセプトは、「本物の自然の学校」

熊本地震（2016年）からの復旧工事の建設残土置き場となっていた場所を、農の未来創造協議会が所有者より無償で借り受け、子どもたちの遊び場として再生しようという試みが「みどりのゆりかご」だ。コンセプトは、「本物の自然の学校」。約2000㎡という広大な敷地を、生態系に準拠しつつかつての里山のような、循環型の庭につくり直すこと。その切り口が「子ども」であり「遊び」であり「生きもの」である。

子どもたちの遊び場や生きものたちの住処が急速に失われつつある。自然環境、社会関係、地域コミュニティをリンクさせることで、再生・創造しようというものだ。

震災により、水路や道路などが損傷・崩壊。その後の復旧工事で、建物や構造物は建て替えられたが、逆に柵や構造物によって震災前には、自由に遊びまわることができた場所へのアクセスが閉ざされて、また、生きものたちの生育環境も失われてしまった。

子どもたちにとって、遊びの環境がいかに大切であるかを震災が思い起こさせてくれた。子どもたちは、遊びを通して、社会や地域やさらには生きものたちとのつながりを生んでいく。

これまで自然保護は「手を触れないこと」が主だった。ここでは、「手を触れること」が自然を保つ手段となる。それは、新たなつながりを生むきっかけであり、自然との本当の付き合いの始まりだからだ。

●いかにムリなく自然なランドスケープがつくれるか、里山づくりの課題だ

●水田の農業用水路から水を引き込み、周囲の環境との連動性を維持しつつ自然再生をはかる

●もともとある植生にまじって、新たにセンダンやヤナギが植えられた

●大量の土砂を持ち込んで小高い山がつくられた

●白岩山と水晶山の二つの里山に囲まれて、古来、地下水の豊富な場所だったという

●対象地に隣接する民家は倒壊。その跡地に、復興のシンボルとなるカフェスペースが建てられた

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞

芝のはらっぱ実行委員会
芝のはらっぱ

東京都港区

●赤い実や紅葉も楽しめるジューンベリーは、「芝のはらっぱ」のシンボルツリー

●パーゴラの横の生垣。朝顔を中心に地域の園芸文化が息づいている

●はらっぱ側だけでなく、公道側からも自由に利用できるようにと特大のベンチが置かれている

●ひろばと公道の境界はガラ舗装がほどこされている。これも道に泥を出さない工夫の一つ

●雨の日も利用できるようにつくられた屋根付きデッキ。はらっぱとの連続性を意識して屋上にも草木が植えられた

街にひらかれた何もない空間

対象地は、2008年より港区と慶應義塾大学の協働で始まった地域交流拠点「芝の家」があった場所（2019年に4軒先に移動）。周辺地域は、低層の木造住宅や路地などの街並みが残る一角で、現在、10～15年後をメドに、再開発に向けて調整が始まっている。そのため、跡地の再利用は難しく、コインパーキングなど低未利用地となる懸念があった。

そこで、地元「北四国町会」と「芝の家」が協働し、地域住民が主体的に管理運営を行い交流するコミュニティ空間の形成を所有者に提案、実行委員会を立ち上げ、2021年5月完成。当該受賞も決まった。

旧芝の家の取り壊しが始まったのが2019年の末。それに合わせるように、昨年2月「芝のはらっぱ」が始動する。「はらっぱをどう使おうか。若い人たちから斬新なアイデアがいっぱい出ましたが、最終的に、何もないはらっぱだけの空間になりました」と話すのは、北四国町会会長で芝のはらっぱ実行委員長の杉山光敬さん。

「いっそ〈草の地面を大切にしたい〉を素直に形にすればいいんだということになって、こうなった」と芝のはらっぱプロジェクトリーダー加藤亮子さんは話す。当初芝生をはる予算はなかったが、助成が決まったことで実現した。

何もない芝生の空間。近隣だけでなくたくさんの人々が集い、交流できる場となっていくことを期待したい。

ポケット・ガーデン部門

コミュニティ大賞

社会医療法人北斗 十勝自立支援センター
介護老人保健施設かけはし
地域の遊び場・憩いの場
かけはしパノラマ屋上ガーデン

北海道帯広市

●ソファセットが配された「緑のリビング」。アーチが緑の天蓋となる日が待ち遠しい

●蛇行する石畳を敷いた散策路。トンネルの足下にはブドウやハニーサックルといったつる性植物が植えられている

左●既存の花壇に残っていた宿根草も活かしながら、全体的に統一感のある花壇にリニューアルされた
右●マリーゴールド、シロタエギク、ギボウシなどがバランスよく混植されている

●ユスラウメやエゾノコリンゴなど、食べられる実をつける樹木が多いのも特徴

十勝の大地を見晴るかす屋上庭園

帯広駅から5kmほど離れた閑静な住宅街に、2017年に開設された「介護老人保健施設かけはし」。運営する社会医療法人北斗では一帯を「北斗福祉村」と名づけ、地域のコミュニティ創出に資する施設整備や活動に取り組んでいる。2019年には敷地内約3000㎡に「北斗福祉村ガーデン 星の庭」と称する、地域に開かれた緑地を造成。さらに今回、助成を活用し、星の庭と連動させるかたちで、3階建ての施設屋上に「パノラマ屋上ガーデン」を整備した。

屋上は以前から庭園として緑化されていたが、今回のリニューアルでは園芸療法の視点も加え、さらに外階段を通じて訪れる、地域の人々にも楽しんでもらえるよう設計された。担当した園芸療法士の剱持卓也さんは「帯広の気候にあった植物を中心に、香りを楽しめるハーブ、手触りの良い植物やアロニアなど実の成る苗木も植え、見て触って、ときには収穫して楽しめる庭になりました」と教えてくれる。

整備には、星の庭整備に伴い発足した市民ボランティア組織「星の庭ガーデナーズクラブ」メンバーや近隣の幼稚園に通う園児、高校生も参加。蛇行する石畳の散策路、つる性植物で覆われるトンネル、花々に囲まれた緑のリビングなどが造成された。今後の維持管理もガーデナーズクラブと共に行っていくという。緑豊かなこの場所で、草花の成長と共に、地域のコミュニティも育っていくに違いない。

有限会社ウィステリアエステート
うわのまち つどいのつつじガーデン
栃木県鹿沼市

●「つつじガーデン」の中心的空間となるあずまや。アールを描くルーバーがほどよい木陰をつくる

●車椅子でも利用しやすい形状にデザインされた「かだんスタンド」。奥に広がるのが市民農園予定地

●「つつじガーデン」には、杰子さんが大好きな東国ミツバツツジを植えた「つつじの森」が隣接

●「かだんスタンド」にはマリーゴールドやリーフレタスが植栽されている

地域に開かれたつつじの庭

かつて「さつき盆栽」の生産地だった休耕地。その周囲は宅地化が進み、畑に隣接する道路には通過交通が増えた。歩道もない狭い道であることから、「クルマを避けたり、近隣の方々がちょっと佇んで、交流できるような場所にしたいと思ったんです」と、土地所有者の斎藤杰子（すぐる）さんは語る。

休耕地を地域のために有効活用したいという思いを受け、エリア・イノベーション事業にも取り組む不動産事業者、有限会社ウィステリアエステートが中心となりプランを構成。東国ミツバツツジからなる「つつじの森」の隣に、あずまや、花壇、ガーデンテーブルなどを配した、地域に開かれた空間「つどいのつつじガーデン」を完成させた。

上記法人代表取締役の斎藤秀樹さんは「この向かいにはサービス付き高齢者向け住宅があり、近くに障がい者福祉施設も移転予定です。ケア施設の利用者さんや地域の方々がこの場所で憩い、草花の手入れも行う。維持・管理を担っていただきながら、交流を育んでいく。そんな拠点へと成長していく予定です」と語る。また、つつじガーデンの後背地に残る約3000㎡の休耕地は、今後、市民農園として整備する計画だという。

ただ通りすぎるだけだった場所にちょっと立ち止まり、人が集い、交流が生まれれば、町の見え方は自ずと変わる。この小さな空間から、温かな地域のイノベーションが生まれることを期待したい。

佐野市米山南町会
米山南町会花いっぱい活動
栃木県佐野市

●バラ園には新たな苗を追加し、ラティスも導入した

●遊具のあるエリアには新たに丸い花壇を設置。グランドゴルフエリアの周囲にも、花々が彩を添えている

●四季を通じて花が絶えないよう、開花時期が長く、また、それぞれ違う時期に咲く苗が混植されている

●パンジーの最盛期（photo提供:米山南町会）

●ガーデンテーブルセットを配したバラ園のあるエリア。カンパニュラ、クレマチス、パンジーなどが配された花壇は、草花の背の高さも考慮して植栽されている

色とりどりの花が咲く、町の交流拠点

50年ほど前、工業団地の住宅地として拓かれた佐野市米山南町。この時、地域住民の交流の場として設けられたのが、広さ約7800㎡におよぶ米山公園だ。公園には以前から、サクラやツツジなどが植栽されていたが、いずれも花の時期は短く、どこか味気ない佇まいを見せていた。そこで米山南町会では佐野市より利用許可を受け、数年前からパンジーやナデシコ、グランドカバーとなるヒメイワダレソウやタイムなどを植栽、年間を通じて花のある公園へと改良を続けてきた。5年前からはバラ園も設置。5月初旬のこの日も、丹精されたさまざまなバラが、見事に咲き誇っていた。

「この度の助成で本当にたくさんの苗を購入でき、またバラ園の設備や苗も充実させることができました。ガーデンテーブルやベンチも購入し、ますます多くの町民に楽しんでもらえる、明るい公園になりました」

そう教えてくれるのは町会長の小早川房平さんだ。運動場を囲むように植えられた800株ほどのパンジーは、いつもここでグランドゴルフを楽しんでいるお年寄りと一緒に植えた。グラジオラス、シャクヤク、ヤグルマソウなど、さまざまな品種を混植させながら、常に何かが咲いているように、との配慮も施された。

「キレイな公園は居心地が良く、お年寄りから子どもたちまで、多くの人が集まるようになりました。人が増えれば防犯にもなります」と小早川さん。花いっぱいの公園は、町を、人を、活気づけている。

※第30回（2019年）にて本賞を受賞

江南の藤保存会
樹齢140年江南の藤・藤棚リフレッシュプロジェクト
埼玉県熊谷市

●藤色のベールの中には、甘い香りが満ちる

●35m×15mの藤棚におよそ15万房もの花が下がる

●直径2mを超える幹。リニューアルされた囲いと藤棚が藤の未来の礎となる

●花房が平均1.5mにもおよぶノダナガフジ

藤の色と香りに包まれる、心地よい異空間

4月下旬、江南の藤（ノダナガフジ）が最盛期を迎えていた。花房が平均1.5mにもなるその藤は、35m×15mにおよぶ藤棚いっぱいに、およそ15万房もの花をつけ、ベールのごとく空間を埋め尽くす。甘い香りも充満し、幻想的な異空間に訪れたようだ。しかもこの花々すべて、樹齢約140年という1本の木になる。敷地中央でうねる幹は直径2m超。県内最大級を誇る。

江南の藤は45年ほど前、熊谷市で農園を営む大島敬治さんの元に、秩父郡両神村（現・小鹿野町）の親族宅から移植された。以降、大島さんは有志らと共に「江南の藤保存会」を発足。保存会メンバーによって日々丹精され、移植当時、3m四方程度だった藤棚も木の成長と共に拡張されてきた。ただ年々藤棚の老朽化が課題に。そこでこの度、藤棚のリニューアルに対し、助成が活用された。巨大な幹と大きく伸びた枝を守る藤棚は鉄骨製。基礎もしっかり固められた。「今後さらに50年、100年と、見事な花をつけてくれるはずです」と大島さん。安心感のにじむ笑顔でそう語る。

花の見頃は4月下旬から5月中旬。コロナ禍の折、毎年開催されている「江南の藤まつり」は中止されたが、今や熊谷市の名所として広く知られる当地には、地域内外から多くの人が訪れていた。そして、時期が終わればすぐに花房は摘み取られ、根元には肥料が撒かれて来年に備える。年間を通じた地道な手入れがあってこそ、魅惑的なひと時が得られるのだ。

NPO法人緑のきずなプロジェクト
花園公園レイズドベッドプロジェクト
千葉県千葉市

右●エディブルフラワーとして知られるナスタチウムやハーブ、金魚草などが植栽されている
下●ゴミ集積場を常にきれいにしておきたいと、掃除に出てきた女性

●花殻を摘んで、雑草を抜いて。子どもたちの主体的な行動が大人を巻き込んでいく

●製作した中学生らのアートワークが施された2段型のレイズドベッド。設置に携わったスタッフと、維持管理を支えてくれる子どもたち。後列右が伊達光湖さん。同左は岩崎寛先生

●以前からあったレイズドベッドも、地域の人々によって維持され続けている

花々の美しさが、ゴミ問題も解決

「せっかくのお花が、ゴミで隠れちゃもったいない」と、ホウキを持ったご婦人がやって来たのは、千葉市花見川区にある「花園公園」の一角。地域の中学生らが製作した「レイズドベッド」の外側にあるゴミ集積場だ。収集日以外のゴミ出しが問題視されていたが、「花壇ができて減りました」と笑顔で教えてくれる。

花園公園にはこれまでにも数台のレイズドベッドが設置され、季節の草花やハーブが植栽されてきた。企画・運営は「NPO法人緑のきずなプロジェクト」。千葉大学園芸学部准教授・岩崎寛先生の監修のもと、地域の人々と共に製作、日常的な手入れを行っている。今回、助成を活用して製作されたのは、南西角地に設置された2段型のレイズドベッドだ。

その特徴は「見て、触れて、香りを感じ」、「気になったら、少し摘んでもよいですよ」と明記されていること。摘むことも、花壇にかかわりをもつことであり、多くの場合、それは愛着につながっていくという。さらに今回は、不法投棄されるゴミ問題を解決するという役割も担った。同法人代表の伊達光湖（ひかりこ）さんは「〈禁止〉の看板を立てるのではなく、〈こんなにキレイな場所に不法投棄はできないよね〉という気持ちを引き出すことを目指しました」と語る。その目標が見事に達成されていることは、冒頭の様子からも明らかだ。地域の人々が愛着をもって丹精する花壇が育むものは温かなコミュニティのようだ。

恵泉女学園大学 人間社会学部社会園芸学科
オーガニック・エディブル・コミュニティガーデン多摩

東京都多摩市

●ワークショップに集まった地域の方々。今後、ポケットパークを維持管理する担い手でもある

●ベンチと一体型になったコンポスト。ポケットパーク内の造作物は建築家・横溝惇さんの設計。右端、コンポストの説明をするのは澤登早苗さん

●ワークショップでは花壇の手入れも行われた

●ハーブが植えられたレイズドベッド。車椅子でも植栽を身近に楽しみ、草むしりなどの作業も可能

●植栽されていたハーブを摘んで、その利用方法を学生が講習中

商店街に新たな魅力を創出する

多摩ニュータウン・豊ヶ丘貝取商店街。商店街を囲む集合住宅群は築40年前後におよび、住民の高齢化率は40%を超える。地域活動の担い手は不足し、住民同士の交流機会も減少していた。そこで、多摩市内にキャンパスをもつ恵泉女学園大学、まちづくり活動を展開する建築家、商店会や社会福祉法人らが連携し、商店街の一角にあるポケットパークを、住民が主体的にかかわりながら維持管理を行うコミュニティガーデンへとリノベーションする計画が立ち上がった。

今回の助成を活用して完成したコミュニティガーデンのテーマは「エディブルランドスケープ」。花壇づくりに加え、高齢者や車椅子でも利用しやすいレイズドベッドを導入。ハーブ類やイチゴなど、食べることのできる植物を植栽し、化学肥料や農薬を使わず栽培していく。また、落ち葉や雑草をコンポストに集めて腐葉土をつくる。こうした作業を、誰もが気軽に、日常的に行えるよう、ワークショップを開催し、住民参加の機運を高めることも計画に織り込まれた。

訪ねたこの日は、完成した庭のお披露目会。近隣住民20名ほどが集まり、恵泉女学園大学教授で農学博士の澤登早苗さんの説明を熱心に聞いている。コンポストのつくり方と使い方、ハーブ水のつくり方も教わり「ハーブ、今度ウチでも使ってみよう」など、楽しげに言葉を交わしあう。ここにはすでに、豊かなコミュニティが醸成されつつある。

栴檀野（せんだんの）自治振興会
まち・里・ひとが繋がる♬ 栴檀野コミュニティガーデン

富山県砺波市

●ブルーベリーの木の周り、セイジ類が集められたエリア

●ポタジェガーデンの一角、カラフルなスイスチャード、大葉などが植えられたエリア

●ハーブや野菜、草花が混植されたコミュニティガーデン。日除けターフの下にはベンチも設置され、屋外でのひと時を楽しむことができる

●石を螺旋状に積んだロックスパイラルガーデン。パーマカルチャーにおける代表的なガーデンデザインの一つで、一つの花壇のなかにさまざまな環境をつくることができる

子どもたちの笑顔が輝くコミュニティガーデン

1982年に統廃合された栴檀野小学校。その敷地に併設されていた栴檀野幼稚園も、2020年に閉園となった。地域の多くの人々が子ども時代を過ごしたかけがえのない場所を、地域のために活かしたい。そんな思いが結集し、多世代が集う場所づくり「せんだんのHILL」プロジェクトが始動。旧園舎には、シュタイナー教育を手本に、野外での自主保育を行ってきた「富山森のこども園」が入居し、コミュニティカフェの運営もスタート。さらにレンタルスペースとして、作品の展示・販売などができるスペースもつくられた。

また前庭では、パーマカルチャーを取り入れた、ハーブや野菜を育てるポタジェガーデンを計画。この度の助成は、このための土壌改良や苗木の購入、屋外での活動を助ける日除けターフの設置などに活用された。

栴檀野自治振興会会長の城田栄一さんは「ここに再び子どもたちが戻ってきて、カフェには遠方からの人も訪れるようにもなりました。庭の維持管理のためには、地域住民によるガーデンメンバーが発足しています。コミュニティガーデンとは名ばかりではないことを、実感しています」と語る。せんだんのHILLスタッフが企画したマルシェを開催した際には地域内外から400名ほどが集い、子どもたちからお年寄りまでが賑やかに交流したという。今後は屋外キッチンやピザ窯をつくる計画もあり、実現すればこの庭は、よりいっそうの賑わいと明るい笑顔で満ちるに違いない。

聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園
数世代の人々が憩う中で子供を育てる聖隷の森づくり

静岡県浜松市

●子どもたちは、自然のなかでさまざまな遊びを発見する

●おやつの時間が終わると、自然に子どもたちがファイヤープレイスに集まってくる

●「森の散策路」は、いろいろな樹木や虫たちと出会える場所だ

●観察池はミニビオトープ。水生動物たちの王国だ

●直径約4mの八角形の東屋の室内には、植物や動物の写真パネルが並んでいる

里山のなかにある広場

当該地は、長年放置されてきたため、真竹の生い茂る荒廃した山と化していた。そこで、真竹を皆伐し子どもたちが集える広場にしたのが本プランである。

聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園は、同グループの教育機関や医療施設が並ぶ場所に、約1800㎡の土地を確保した。そこに東屋とファイヤープレイスを中心に、落葉樹、花木、果樹や草花を配する里山風の広場をつくる。緑や草花を楽しみに訪れるさまざまな世代の人たちと、子どもたちが自然のなかで交流し、自然を感じ取れる場所になればいい、そんな願いが込められている。

「子どもたちといっても園児だけじゃなくて、高校生や学生さんたちも遊びに来てくれて、目的は果たせたかなと思っています」と話すのは、こども園の総園長・太田雅子さん。

「ここの特徴は、一般開放していること。今日も、近所のお年寄りがベンチに座って雑談してましたよ」とも教えてくれる。

今回の助成で新たに桃やプラム、イチゴが植えられた。見て鑑賞するだけでなく、食べられる植物を積極的に育てていきたいという。想像力を働かせて自由に利用できるのが広場の特徴。ファイヤープレイスでは、実際に火を起こして子どもたちはマシュマロなどを焼いて楽しんでいるようだ。里山のなかの広場のこれからに期待したい。

京都府立農芸高等学校
僕たちの発信緑(はっしんりょく)!
～郵便局から緑の風をお届けします～

京都府南丹市

●京都府警は命の大切さを学ぶ「ひまわりの絆」プロジェクトを展開。それにあやかってコンテナガーデンには大輪の花が咲く

●「やぎさんゆうびん」の童謡をモチーフに2基のやぎのトピアリーが設置された

●葉の表面に字が書ける通称ハガキノキ（タラヨウ）がシンボルツリーとして植えられている

●郵便封筒がデザインされたウッドデッキ。周囲には1年草（校内で育てられた）の草花が植えられている

●植栽を勉強している高校の生徒たちがつくった庭だということをアピール

コミュニティ空間を緑化推進の場に

京都府立農芸高等学校は、地域社会の発展に寄与する社会人を養成することを目的に、地域の課題に積極的に取り組んできた。造園に関する専門的な知識・技術を駆使して、生徒自らが地域の課題と向き合い、市内に庭という作品を発表する。これまでいろいろな場所で、庭づくりを進めてきたが、多くの人々の目に触れるような場所は、じつは、それほど多くはなかった。生徒たちは、学習成果が目に見える形で、発表できる場を探していた。

その頃、街の中心地にある郵便局の玄関前には、地被類が繁茂するような、居心地の良くない空間が広がっていた。その空間を市民が憩える場にできないだろうか。庭という発表の場を探していた農芸高校と未利用地の有効活用を模索していた郵便局。その両者の思いが一つに実を結ぶ。多くの市民が利用する郵便局に、ひまわりを中心とするコンテナガーデンとやぎのトピアリー、郵便封筒をデザインモチーフに階段状に組まれたウッドデッキがつくられた。

農芸高校の生徒たちが全体の計画、設計、施工をし、生徒と郵便局員、市民が一緒になって植え付けを行った。また草花の植え替えや剪定などのメンテナンスは生徒たちがやり、日々の水やりや草取りなどの維持管理は、郵便局員が手伝う。今後両者の関係はさらに深くなると共に、緑の風が街全体に広がっていくに違いない。

※第30回（2019年）にて本賞を受賞

一般社団法人日本造園組合連合会
匠の庭師が日本庭園文化を世界に発信

東京都港区

●新たな景色が展開する結界としての門。新時代の技と歴史文化の技を空間の結界として扱い、既存の門の改修を行う

日本庭園の技（わざ）でおもてなし

2015年度から2020年度に向けた期間限定のプログラムとして始まった、花と緑で観光客をお迎えする特別企画「おもてなしの庭」。その最後の受賞となったのが、一般社団法人日本造園組合連合会による「逍遥の庭」と「はなやぎの庭」だ。場所は、港区芝公園内の都立芝公園の一角。日比谷通りを挟んだ向かいには、増上寺が控える。

芝公園は、1973（明治6）年の太政官布達により、上野、浅草、深川、飛鳥山などと共に指定された日本で最初の公園の一つで、徳川家の菩提寺だった増上寺の境内が公園地になった。

江戸時代の面影が残る芝公園に「日本の庭園文化」を発信する二つの庭園をつくろうというのが基本コンセプトだ。一つは、庭石の配石や竹垣創作、樹木配樹など日本庭園の作法で庭づくりをする「逍遥の庭」。風光明媚な場所を辿る東海道の旅を想起させながら日本橋方向へ広がる。

もう一つの「はなやぎの庭」は、増上寺の三解脱門の威容を眺めつつ品川方向へ広がる庭。「江戸の賑わいのまち」がテーマで、庭師たちが作庭のプロセスをパフォーマンスする空間になっている。

庭は昔から接待の場、すなわちおもてなしの場所だった。和の庭園文化、日本の庭づくりを通して、おもてなしの心遣いを世界に発信できればという願いが込められている。

●期間限定でつくられた竹の技の結晶「竹花火」

●市松模様の敷石と金閣寺垣が絶妙なハーモニーを醸し出す

●門を抜けるとまず古瓦のうろこ垣が客人を迎え入れる

●石のベンチと緑が織りなす和モダンの庭

●天の川をイメージさせる月の庭。ここが番所の跡地であることを示す井戸があしらわれた

●龍の背中を模した「臥龍垣（がりゅうがき）」の一番低いところの背後には、東京タワーがそびえ立つ

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国を対象	緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果などを取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成及び地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ地域のシンボル的な緑地プランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国を対象	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育、身近な環境の改善に寄与するアイデアを盛り込んだプランを募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞800万円以内（助成金）
	緑化大賞	2点程度	副賞800万円以内（助成金）
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞100万円以内（助成金）
	コミュニティ大賞	9点程度	副賞100万円以内（助成金）

審査委員

委員長	進士 五十八	福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授
委員	金子 忠一	東京農業大学教授
	榊　真一	国土交通省都市局長
	鈴木 裕一	株式会社産業経済新聞社上席執行役員
	永山 妙子	マネジメントコンサルタント
	村上 暁信	筑波大学システム情報系教授
	稲垣 精二	第一生命保険株式会社代表取締役社長
	小野 文夫	一般財団法人第一生命財団常務理事
	椰野 良明	公益財団法人都市緑化機構専務理事

※役職は2020年審査会当時

スケジュール

募集期間	2020年4月1日～6月30日
審査会	2020年9月17日
入選発表	2020年10月22日
表彰式	新型コロナウイルス感染症予防のため延期

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会
特別協賛	第一生命保険株式会社
協力	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、都市緑化基金等連絡協議会 株式会社フジテレビジョン、株式会社産業経済新聞社、株式会社ニッポン放送

※2020年度運営体制

city&life 別冊

2022年3月15日発行

発行者	一般財団法人 第一生命財団 東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階 電話03-3239-2312
編集協力	株式会社 アルシーヴ社 斎藤夕子
撮影	坂本政十賜
デザイン・レイアウト	生沼伸子
印刷	株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life別冊